

「戦争は時代錯誤」

2022年04月05日

「東京新聞」の4月1日の朝刊に、興味深い記事が掲載されていたので、紹介したい。1937年（昭和12年）、日中戦争の頃、財団法人比律賓（フィリピン）協会評議員で、南部のバシラン島で、大規模なヤシ園を経営していた山村樞次郎氏は、英文でパンフレットを作り、配布した。送り先は、フィリピン自治政府のマヌエル・ケソン大統領、当時の政府首脳らと幅広い人脈である。そのパンフレットは、「日支紛争に関し比島の友に告ぐ」というタイトルで、「（日本が求めるのは）領土でもなければ国土でもない、最小限度の生存権」「決して他国を侵略せんとする企図に基づけるものではない」と、日本の立場を弁明し、下記のように訴えている。「（中国側が）徹底的に挑発的態度に出（い）てた為（略）極東の情勢は政治的に経済的に根底から破壊されんとしている。」「要求しつゝあるのは（略）抗日政策の放棄であり、赤色勢力の駆逐であり、（略）治安確保にある。」当時の実業家たちは、この考えが常識と捉えていたのであろう。パンフレットに対し、米国政府から、統治下のフィリピンに派遣され、職業教育に身をささげていたギルバート・ソマーズ・ペレス氏は返事の手紙を寄せている。その手紙が、山村氏の娘さんの遺品から見つかった。

〈文明化された現代において戦争は時代錯誤だと思います。何千年もかけて文明化してきたのに、一皮むけば世界が1万年前と同じくらい野蛮であることは奇妙です。国々は発言をほごにし、約束した義務を尊重しません。国家が倫理観を持たないなら、個人がどうしたら持ちえましょうか。

もしも政治屋と戦争卿と戦争商人が戦場で対峙し、互いに撃ち合って倒れたなら、世界ははるかに良くなるでしょう。しかし、今日において戦争が生み出すのは孤児であり、夫に先立たれた妻なのです。私たちの近代兵器により子供たちや女性が引き裂かれます。今日、私はこう感じます。世界のすべての国々が原始的な野蛮さから、せめてほんの数フィートだけでも離れているならば、と。

自然を愛する国で、命を破壊する戦争を本当に好む国などないでしょう。挑発があったとしても、両国の人々に痛みをもたらす残酷な戦争の必要があったとは思いません。人は見えないところで心を焼かれ、涙を流すでしょう。苦い涙を隠しもしないでしょう。

私はやみくもな平和主義者ではありません。今日、生き残ろうとする国は武装せねばならないことを知っています。しかし、私たちの文明がいまだにそうした（軍備の）必要のない地点に行き着かないことを心から残念に思います、（1937年11月26日）

85年前のペレス氏のメッセージは、何と高い歴史性と倫理観を持っていることか。深い感銘を受ける。彼のメッセージは届くことなく、フィリピンでは、同国人が111万人、日本人側が52万人、米国側が5千人の命が失われた。山村氏の娘さんの遺品から見つかった貴重なメッセージを、今の世界の政治家たちは真剣に聞き入り、心に深く留めてもらいたいものである。

ロシアのウクライナ侵略戦争は、ペレス氏が言うように、時代錯誤であり、この戦争が生み出しているのは、孤児であり、夫に先立たれた妻である。野蛮以外の何ものでもない。

「善」と「悪」を単純に割り切るには問題があるという意見を聞く。確かに、両国と関係国の間には複雑な事情が絡んでいよう。しかし、ロシアの理不尽で、無差別な民間人の虐殺は断じて、承服できない。停戦交渉は難航しているらしいが、一刻も早い停戦を期待する。戦果を挙げた方が有利になると報道されている。力でしか、解決方法がないのか。ゼレンスキー氏の成人男子は皆、武器を持って戦えという号令にいささか疑問を感じる。